

テーマ設定の趣旨とワークショップの展開

コーディネーター 田原淳子(国士舘大学)

キーワード:「ジェンダー・フリー」、体育・スポーツ、ジェンダー・バイアス、ジェンダー・センシティブ

1. テーマ設定の趣旨

近年、「ジェンダー・フリー」をめぐるバックラッシュが起こり、各方面への影響が懸念されている。スポーツにおけるジェンダー・フリーの推進に資することを目的の一つに掲げてきた本学会では、まず5年間の学会活動を総括するワーキンググループにおいてこの問題が検討された。そして「ジェンダー・フリー」という用語の使用については、拙速に結論を出すことなく、慎重な議論を重ねて検討するとの見解が示された(本大会基調講演の抄録参照)。さしあたり、ホームページ上ではこの用語の意味と文言の使用について、学会としてのスタンスを検討中である旨を記載し、学会内に研究プロジェクトやワーキンググループを充足して、この用語の意味内容や定義、用語をめぐる論争などについて学術的に検討する方針が示された。これらの方針は理事会で承認され、2007年3月に開催された春季研究交流会において、用語に関する具体的な検討が始められた。

春季研究交流会では、木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル』(白澤社、2005)、イダヒロユキ「『ジェンダー概念の整理』の進展と課題」ほか、この用語の概念およびバックラッシュにかかわる多数の文献・資料を持ち寄り、議論が行われた。その中で、「ジェンダー・フリー」という用語はバーバラ・ヒューストンが最初に使用した文脈とは異なって日本で使われるようになったこと、また、バッシングの対象となっている行動は、「ジェンダー・フリー」本来の意味するところとは異なる曲解によるものであることが確認された。

こうした「ジェンダー・フリー」用語に関する一連の取り組みを背景に、このワークショップではよりオープンな形で、体育・スポーツの立場からこの問題を検討しようとするものである。まず、「ジェンダー・フリー」についての一般的な概念を整理した上で、体育・スポーツの分野では、どのようなジェンダーにかかわる問題が生じているのか、諸問題の解決には何から「フリー」になることが求められるのか、現場の問題に即して考えるとき、「ジェンダー・フリー」という用語はどのように理解されるのか、などを、本学会における用語使用の是非も含めて、検討することを目的としてこのワークショップを設定した。

2. 「ジェンダー・フリー」という概念について

「ジェンダー・フリー」という用語が日本で導入されるきっかけになったのは、東京女性財団が1995年に発行した報告書およびハンドブックであるといわれている。そこでの「ジェンダー・フリー」の意味は「ジェンダー・バイアスからの自由」であり、「性別にこだわらず、性別にとらわれずに行動すること」であると定義された。しかし、前述のように、この用語の意味は日本において必ずしも正確に伝えられなかったという指摘がある。この用語を最初に用いたヒューストンは、むしろジェンダー・バイアスが生起している状況に応じて直接的な介入を行う視点(ジェンダー・センシティブな視点)をもつことの重要性を主張している。一見わかりやすいように思える「ジェンダー・フリー」という用語を用いることで、ジェンダーの問題を単純化し、真相を見えにくくしているという指摘もある。

また、「ジェンダー」という概念が、変化し、発展していることにより、使用する人によってその意味や主張する内容が一樣ではないという現状がある。したがって、「ジェンダー」の意味によっては「ジェンダー・フリー」という用語が意味をなさない場合もある。

3. 体育・スポーツにおける事例紹介

体育・スポーツにおける「ジェンダー・フリー」とは何かを検討するために、中込常昭さんに柔道の事例を、玉村美代子さんにテニスの事例を紹介していただく。これらの事例を通して、体育・スポーツ界に潜むジェンダー・バイアスと「ジェンダー・フリー」の実践について考えてみたい。

4. ワークショップの展開

本学会の過去5回の大会で取り上げられたテーマの中から、参加者がテーマを選び、グループ分けをする。各グループは、選択したテーマについて現実に起きているジェンダーにかかわる諸問題を挙げ、問題解決のポイントを整理し、具体的な解決方法について話し合う。また、体育・スポーツにおいて「ジェンダー・フリー」という用語を使用することの妥当性についての検討も行う。最後に、各グループの発表を行い、全体討論を行う予定である。

男女別カテゴリーの是非を中心に（テニスを事例に）

玉村美代子（JSSGS 会員）

キーワード：テニス、ミックスダブルス、日本女子テニス連盟、意識、異性愛主義

1. はじめに

今日「ジェンダー」ということばが聞きなれないことばではなくなった。ではジェンダー問題をどのようにスポーツの現場で解決していくのかということ、その方向性は具体的には見えていないように思う。どのような実践が可能なのか、今一つ明確にしていくことが必要なのではないか。

それを考える材料のひとつとして、自身のさまざまなスポーツ経験を通して気づいたことの中から、特にテニスのミックスダブルスを提起したい。

2. テニスにおける女性の位置づけ

女性のテニスの歴史を見ると、世界の4大会に女性の部ができたのは、常に男性のみの開催から数年後であった。日本の場合も大会の開催は遅れたが、軟式テニス が先に広まったことにより、女性のテニス人口が増え、現在では、硬式テニスでは男性とほぼ同数の女性がテニスを楽しんでいる。

プロの賞金も世界4大会で男女同額が達成され、メディアの取り上げられ方では、日本人選手の活躍ということで、女子ダブルスがテレビで放映されている。

組織としては、国内には「日本テニス協会」と別に「日本女子テニス連盟」がある。俗に「女子連」とよばれ、主婦が中心の団体であるが、活発な活動をしていて、ダブルスや団体戦の試合が平日を中心に多く企画されている。

また、各地域では、平日に、年間通してのリーグ戦が開催されたり、テニスコートをもつクラブの主催するテニススクール、試合などがあり、フルタイムの仕事を持っていない女性にとっては、テニスに親しむことのできる機会や環境が整っている。とはいえ、県のテニス協会にも女性の役員は少ないなどといったジェンダー・バイアスが見られる。

また、男子のテニス、女子のテニスという言葉には、速く強く打って攻撃的な「男らしい」テニス、ロブをあげてつなぐのは「女らしい」テニスといったイメージが根強く残されている。

3. ミックスダブルスの特性

意識の問題として、ジェンダーが顕著に表れるのはミックスダブルスである。「男らしさ」から男性にかかるプレッシャーも相当である。女性の甘えも見られるであろう。しかし、それでは勝負に勝てない。お互いに自己のことに集中して、持っている力を最大限に効率よくペアとの関係の中で活用する方法をみつけださなければならない。「男性に任せて」とか、「女性をカバーして」という余裕はなくなってくる。お互いにペアを一選手として認識するようになる。

生涯スポーツとしてのテニスにおいて、競技性が高まると、「男らしさ」とか「女らしさ」といったジェンダー意識が薄れていくのではないだろうか。男性は「攻めてポイントをとる人」、女性は「男性にポイントがとりやすくなるようにお膳立てする人」といった役割分担にとらわれているわけにも行かない。一選手としてペアを理解しようと努力することにより、性別に対する偏見が結果的になくなっていくと思われる。究極的には男性と女性の組み合わせでなくても、どんなペアでもよいというダブルスの試合も可能になるのではないだろうか。

シングルの試合でもかつて男性対女性のプロの試合が行われたことがあった。トップアスリートになるほど性別よりも個人の能力としての見方ができていると推測される。

ペアが男女でなければならない理由の根底には、勝負よりも社交性を重視した異性愛主義があり、ミックスダブルスの存在理由になっていることは、誰でも参加できるスポーツを考える上で一つの問題である。

4. 性別二分法を越えて

ダブルスを女子ダブルスも男子ダブルスもミックスダブルスも参加が可能という一つの大会を行うことが案できる。男女のカテゴリーにとらわれず、性的マイノリティーの人も気楽に参加できるだろう。

ミックスダブルスという形式は、障害者も含めて、多様な人々が一緒に参加できる方法を模索する入り口の一つとして、注目に値すると思う。

柔道におけるジェンダー事情

中込常昭（放送大学大学院）

キーワード：柔道 嘉納治五郎 昇段資格 競技人口

はじめに

競技スポーツにおけるジェンダー・フリーについて考えるための材料を、柔道界の現状を紹介することにより提供する。

柔道は1882年、嘉納治五郎が当時の柔術諸派の粋を集め創始した。嘉納は典型的な性別役割分業観を持っていたが、その一方で柔道においては女子も男子と同様に修行すべきとしていた。ただし試合については、負けまいとして無理をするという理由で当面禁止していた。欧米各国では早くから女子の試合が開催されていたので、後に日本国内で女子の大会が始まったが、試合経験の乏しさなどにより国際大会において日本が遅れをとった。

昇段資格の男女差

現行の昇段規定は全般に、試合等で同じ実績を挙げたとしても、女子は男子より高段になるほど昇段が遅くなるように定められている。

具体的には必要とされる経過年数が男性より長かったり、初段から複数の形を課されたりしている。称号も、男子が単に「段」であるのに対して、女子は「女子段」と呼称される。

昇段資格の問題については、指導者の間からも疑問が投げかけられている。

国内の柔道大会の現状

各年代の柔道大会（全国・地域）を実際に観戦し、あるいは選手・役員として参加した体験をもとに現状を報告する。

全般に、小学生は基本的に男女カテゴリーを分けないが、中学生以上ではこれを分ける。世界につながる全国規模の体重別個人戦ではほぼ男女で同様の比重が置かれるが、団体戦や無差別となると女子の試合は周縁化されてくる。この傾向は地域の大会でより顕著である。

年代別にみると、まず小学生の全国大会では、特に男女でパフォーマンスの差は感じない。女子が男子に対して気後れするようなこともない。

高校生以上の全国レベルの団体戦では、男子が無差別

であるのに対して、女子が体重別にオーダーの設定を要求されることがある。「柔能制剛」の表象である小さい者が大きい者を投げるといった期待は、女子選手にはかけられていないかのようである。

生涯柔道の全国規模の大会としては、1949年から存続する全国高段者大会がある。五段以上の男性に限られ、昇段のために点数になるので、毎年千数百名の参加をみる。これに対し、2004年より始まったマスターズ大会は、段位や性別に関係なく、30歳以上の全ての柔道家に体重別年齢別の試合に参加することを保障している。形の部門では、男女カテゴリーを取り扱っている。

競技人口の男女比

この数年は日本国内で20数万人を数える程度で推移している。女性は小学校卒業後急速に減少し、全体では男性の1割に満たない。

ちなみに最も競技人口の多いフランスは総数50数万人。女性の加齢に伴う離脱は日本ほど多くなく、全体でも男性の2～3割に上る。

私の考えるジェンダー・フリー

競技スポーツにおけるどのようなあり方がジェンダー・フリーであるかということを考える場合、1.常に当事者である競技者たちの声に耳を傾けること、2.競技種目ごとに個別に考えること、の2点を重視したいと思う。その上で等しい実績には等しい評価を与え、個々の選手が持てる力を遺憾なく発揮し、自分らしくパフォーマンスできるよう配慮することが肝要と考える。柔道では全般に女子選手に試合機会が少なく、昇段等実績に対する評価も十分でない。

柔道において例えば私が考える大会形式として、(体重別)混合団体試合を提案したい。特に、女子の参加が少ない地域レベルの大会で取り入れてみてはどうかと考えている。五人制なら女子でも五分の一の責任とやりがいチームの一員として参画することができると思う。